

樺太紀行

樺太の印象

ロシアの文豪アントン・チェホフの名は我が國にも親まれてゐる。「櫻の園」を譯文で讀んだ人も随分多いであらう。そのチェホフが明治二十三年に樺太を訪問して「樺太紀行」をかいてゐる。チェホフは流刑囚の状態を視察して、大いにその取扱の改善を叫んだのである。今の樺太は流刑地ではなく、多くの日本人によつて開發され、繁榮してゐるのである。その繁榮の餘澤をもつてわたしはわたしなりの旅行をしたのであるが、この短い紀文に同じく樺太紀行と名づけるのである。

樺太へきて第一に感じたことは豫想外に廣いところだといふことである。國境以南で南北

が百十六里もあるのであるし、東西も廣いところで四十里もあるのである。數字だけでなしに歩いてみて廣いといふことをしみじみ感じたのである。これは樺太自體がまちがつてゐるわけではゆめ／＼ないので、わたしの豫想そのものがまちがつてゐたのである。何となしに樺太は半分だといふこと、半分は全體の二分の一だから小さいといふこと、樺太は細長いといふこと、細いといふことは面積の少いといふことだと、しらす／＼の間に思ひ込んでゐたこちらの無調法なのである。かうした錯覺を持つてゐる者がわたしの外にもなきを保し難いと思ふのである。とにかく樺太はきてみるとなかく／＼に廣いのである。

その次に感じたことは、山野の姿が廣漠として甚だ大陸的だといふことである。下關から朝鮮を経て滿洲に入るときいつも氣づくことは、山の姿の三變することである。九州北部の地勢はいかにも峻峻で山岳的であるが、對馬の山々はそれと同じく、釜山附近もまたその連續と思はれる。それが京城附近までゆくと、山は山でも著しく瘦せて骨立つてゐるのがめだつ。そのたゞすまゐにはどこかうち開いたところがある。開城より北へゆくに從つて山の稜がとれてひくく圓みを持ち、次第に大陸的になつてくるのが感じられる。ところで青函連

絡の船が函館に近づく頃に遠望した北海道の山の形といふものがまた頗る大陸的なおほらかなさがある。それは海上の遠望だけでなく、北海道全體の趣なのであつて、内地に比べると、たしかに大陸的地勢と云はなければならぬのである。さらに宗谷海峡を渡つて樺太までくると、樺太の山野は一そうゆるやかで大まかで、大陸的に見えるのである。日本は兩方の端で大陸につながつてゐるのであるから兩端程大陸的地勢であり、中央程海岸島嶼的地勢になつてゐるといふことがわかるのである。

豊原・眞岡

九月三日、稚内につく一時間前位に夜が ажける。四邊の風物は頗る荒寒たるもので、北のはてに來たことをおもはせる。連絡船は超満員である。風強く少々酔ひきみなので中食をやめにする。大泊埠頭まで豊原から人々が迎へに出てくれる。日くれて豊原着。時局柄といひ長途の旅といひ、思はぬ支障のおこることを案じてゐたのに、すべて豫定のとほりにいつて、無事につくことのできたのはありがたいことであつた。

豊原はゆるやかな丘陵の麓に大都市計劃でできたゆつたりした町である。但し町幅があま

りに廣いために、あらゆる建物がみな小さく見え、とりとめない感がする。公園は町の背後の丘陵にかけて營まれて頗る見はらしがよい。公園から下つたところに樺太廳博物館がある。これは豊原を訪れるものの必ず一見すべきところである。考古學的資料、民族學的資料、動植物地質學的資料の樺太に關するものを網羅してあつて、まことに便利である。

六日、眞岡にゆく汽車は美しい緑野の都豊原から次第に山岳の方へ登つてゆく、沿道に見えるものは紫紺の鮮やかな龍膽の花、大露の群落、羊齒の群落が褐色に色づいてゐる。山には立枯、焼枯の樹が多い。トド松の巨幹にサルオカセが下り白枯れの幹が光つてゐる。三時間半程で眞岡につく。この夜泊つた橋本屋といふのは、近頃まで料理屋であつたのが轉業したのでさうな。頗る豪華な建築である。漁業などで一攫千金の人々の遊興する場所として、かゝる土地なればこそ、かゝる設備もできたのであらう。こゝで私を待つてゐてくれた人の一人がK君であつた。私がKですと名乗られてつくつく顔をみなほしたのである。幾十年ぶりであらうか。よくよく見ると昔の面影はあるが、少年の日に別れたまゝであふ時もなくその間にお互にすつかり年よつてしまつたのである。K君は北海道で苦勞し、また樺太でも

苦勞したときいたが、今は子供達も成人して、平安の晩年を迎へてゐるらしい。

七日、夕四時半に眞岡を發し、野田で一時間近く待つて乗かへ、泊居に着いたのは夜九時であつた。S氏夫妻の歡待をうける。

西岸縦走

八日、八時泊居出發。約一時間で久春内につく。こゝで汽車はなくなるのである。こゝから東海岸の眞縫までバスが通つてゐる。さて我々はこゝでハイヤーを得て北上する筈であつたが、待てどくらせど姿を見せぬ。南方へ行つたので、やがて歸つてくる筈だといふ。旅館に休憩して中食をしながら車のくるのを待つ。不安のうちに漸く來た。相客はみんなで四人二時久春内を出發し一氣に惠須取に向ふ。久春内から珍内まで十三里、珍内から鶴城まで十四里。鶴城から惠須取まで八里合せて三十五里を六時間で走破したのである。途中小便のため五分間位づゝ二回とまつたきりである。この運轉手君は今日は公用で午前三時から起きて走り、先刻久春内でおにぎり三つ喰つたきりで往復八十四里を走つたといふ。この行程は地圖で見ると極めて單調な海岸線であるが、走つてみると道路そのものいゝくの変化があ

り、日暮れて北邊の夜氣にふれるまで實に千變萬化で腰の痛みも忘れたのである。以下は途上の覺えがきである。

久春内の町を出ると海を左に見ながら、道は一直線に続いてゐる。丘陵を縫ひ畑を縫ひまつすぐに上つたり下つたりしながら、ひた走りに走るのは頗る痛快である。空は氣持よく澄みわたり、僅かに雲が流れてゐる。日本海は左手にどこまでも限りなくひろがつてゐる。大きな山の裾がいくつにもひだをなして海に入つてゐる。そのひだを横斷してまつしぐらに走る。畑には麥が少々、大部分は馬鈴薯である。ところ／＼に牧場があつて、放牧の馬と牛とが見える。その餘はすべて荒蕪の原野。

高い臺地へ車が登つていつた。登りつくしたところから前方に森が見え、その向ふに町が見える。そこが珍内である。珍内に入る前に沙丘地帯があつて「岩高蘭沙丘」と標示せられてゐる。高山植物の岩高蘭の叢生地である。白鳥が渡つてくるといふ白鳥湖は珍内の附近であるが沿道からは見えぬ。

しばらくゆくと來知志湖のほとりに出る。この湖は周圍約十里、北方の山群が湖面に影を落してゐる。水の色はやゝ濁つてはゐるが、人間の臭みに穢されない原始的な幽邃さを持つてゐる。湖畔に四五軒のアイヌの部落があり、長髯を垂れた親爺が湖の面をみながらモツソリと立つてゐるのはこの湖にあつらへむきの光景であつた。

湖の西側につゞくとトド松の林、その間の一筋道を走りつゞける。ところどころ林がきれて湖の面が隠顯する。林を出てこんどはどこまでも海岸線に沿うて走る。草の穂の上に水平線が流れてゆく。そのうちに珍しくも斷崖が見え、道は斷崖の上へ登つてゆく。こゝを伊皿山道といふ、どうなるのかしらんと思つたら、突き當つたところが墜道になつてゐて、墜道を出て下つたところが鶴城であつた。

日は漸く暮れ近くなつてきた。薄暮の天内には石炭が積みあげてある。幌岸には材木が積んである。さうした村々を過ぎてゆく間にすつかり夜になつてしまつた。みなそろ／＼心細い思ひをしながら、車の中にじつとしてゐるのである。崖の下を一廻り廻つたところで遠くに賑やかな燈火が見えだした。それが惠須取であつた。

ツンドラ

惠須取のN家ではもてなしの用意をして待つてくださった。もてなしの一つに風呂を沸かしてあつた。そのお湯は褐色に濁り、皮膚にヌルリとした感觸があり、あがつたあとでもいつまでも暖かみが残つてゐる。まるで温泉の感觸である。これがツンドラ地帯の水である。ツンドラは凍苔である。年々に生育する蘚苔類が次第に枯死凍結して、數尺の層をなしてゐる。いはゞ土壤がうすいところで四五寸、あついとこころは二三尺もある苔の皮をかぶつてゐるのである。四五寸といつたのは、あとで惠須取の山へあがつて崖のくすれたところのみた厚さである。二三尺といつたのは街路の工事場で見えた厚さである。惠須取の町ではその凍土の上に舗装をしてある。さうした道路を自動車などが通過すると、ブク／＼とゆれるのである。その厚い苔の下に溜つた水、それがこの土地の使用水である。しかし飲料にはできぬから、飲料になる水の出るところは特に大切に、方々から汲みにあつまるのである。もてなしの御馳走の中に出た「チカ」といふ細身の美しい魚があつた。形よく、色よく、味よくてまことに珍重すべきものである。内地の鮎に比すべきものでもあらうか。

山脈横断

十一日、惠須取は、山市街、沼の端、濱市街といふ少しづつ離れた三つの部分から成り立つてゐる。パルプと石炭との町である。こゝから東海岸の内路まで二十四里。脊梁山脈を横断して省營のバスが通つてゐる。九時少し前に惠須取を出發したバスは午後三時すぎに内路についた。途中白雲峽といふところで休憩して中食を認める。こゝが中央山脈への登り口である。こゝから山を越えるのに大かたの日は時雨が降るのださうであるが、今日は白雲は空高くあがつて、雨はこなかつた。

内路から汽車にのること三十分で、敷香につく。敷香は東北沿岸の要地である。ツンドラ地帯に營まれた平坦な感じの町である。白鶴旅館の客となる。こゝも最近轉業したものの由で、什器等頗る豪華である。こゝの風呂もまたツンドラ淡濁の水であつた。

十三日、一二三人々とともに街を見て幌内河の河口にゆく。幌内川ははるかに露領から流れて敷香で海に入るのである。ツンドラ地帯を流れてくるので、水は淡赤褐色を帯びてゐる。對岸にオタスの森が見える。オタスの森はギリヤーク、オロツコ等の土人の居住地であ

り、學校も設けてあり、以前は民藝品をも製作販賣した由であるが、今は中止になつてゐるらしい。

オホーツク海

十四日、朝敷香を發し、夕の六時豊原に歸着するまで終日車中に坐る。海岸線は單調であり、沖邊をすぎゆく船一つない。終日オホーツク海と相對してゐる。この海は日本海に比べると青藍の色があせ白けた感じがする。途中心に残つたもの。近幌驛の東北に聳えてゐる突阻山の異様な風貌。これは樺太には珍しい突兀たる嶮山で、山頂は赤褐に露出し、これに夕陽が反照して紫赤に燃えたさまは美しかつた。白鳥驛から見える白鳥湖は、白鳥の寄りくるところだといふ。名は美しいが單純な平蕪の中の小湖で風光の見るべきものはない。美しかつたのは處々に見る白樺の林である。やゝ大きな樹の密林はあざやかな白の縞柄を見るやうで美しい。夕陽をうけた丘陵に若樹の林が點々としてゐるのにも心惹かれる。その幹の白は寒冷にあらず、華麗にあらずして、ひとへに澄明な親しみを感じさすのである。

豊原から豊原へ、飛脚のやうな旅行ではあつたが、樺太の東西兩岸を、南北に亘つて順序

よく一週することができたのである。再び豊原の近親に迎へられては、我が家へ歸つたやうに思ひ、しばらく旅の疲れをやすめた。旅行が飛脚のやうなだけでなく旅行記もまたはなはだ忽々蕪雜の覺書にすぎぬのである。

(昭一九・九)

衣笠山のぼりて

夕山に登りてみればとほ山の高山比良は雪つみにけり

夕空の東はすでにおぐらきに暮れのこりたり雪のとほ山

松山を煙かそけく流れたり山のかたへに焚火せるらし

山裾に人らつどひて火を焚けり山を下りて我もゆかまし

(昭一一・一)

旅のこゝろ

旅する者の心は自然の悠遠に憧れる心であり、人生の生々流轉を願望する心である。ゆけども／＼盡きるところなく路は路に連り、驛舎は驛舎を迎へる旅を思ふと、我が心は一種の懐しさ、淋しさ、やるせなさにとらへられる。今日通つた町は明日宿る町ではない。次の日には如何なる風物が自分を待つてゐるであらうか、など思ひながらたま／＼日くれて知らぬ町の光の中に辿り着いた時などは、不思議な心ときめきを感じるのである。遠山は限りもなく連なつて、碧層々の間を白雲が去來してゐるのである。その重疊せる山巒をわけて一脈の水路溶々と流れ降つてゐるのである。かうした中へ入つてゆくとき、如何に我々は自然の深さと遠さを感じさせられるであらう。旅は我々をして人生そのものゝ姿をしみ／＼と味

旅のこゝろ

はせる。

急湍激流細波江海の水の姿、無心にして岫を出で、又は雲霧雷鳴する雲の姿、昨蓬今別のさま／＼の男女、それらの中に身を没する時、自然と人生と綯ひ合され、現實と夢想と手をとりに交すさま／＼の境地を我々は味はふことが出来る。——私は決して旅行家ではない。しかしながら旅によする憧憬の深さに於て、敢て旅を語らうと思ふものである。

古い我々の郷土に行く時、單なる名山勝地がある許りではない。そこには古人の多くの心が印せられてある。白川の關を越ゆれば能因法師が居り、柏原の寒驛には一茶が待つて居る空知川のほとりには獨歩の心が、宍道湖畔には小泉八雲の面影が——といふやうなものである。

私の感銘の深かつたことの一つは、加賀の那谷寺に賽した時であつた。寺の縁起によればこゝは花山院の開基であつて、院は西國三十三所の靈場を開いた後、更に北國三十三所を開く志あつてこの地に止まりたまうた。それで最初の那智山と最後の谷汲山との各一字をとつ

てこゝを那谷と名づけられたといふのである。もとよりこれは一場の傳説であつて、史實の如何は私の知るところでないけれど、かうした事蹟が花山院に寄せられたといふことは意味あることである。當時私は『大鏡』をよんでもまもなくであつたので、青春廿一歳の花山院が藤原道隆隆家父子の奸計にあさむかれて不本意にも出家をとげられた、その夜の光景を思ひ浮べ、それから後二十年の生涯を壓迫と不如意の中に、詠歌と信仰に心を寄せて淋しく過されたことを思ひ浮べたのである。この花山院が通路の開山であるとは面白いではないか。通路に出る者は不治の病に悩む者か、あさましい人生の葛藤に心を傷められたものであることは昔も今も變りはない。これらの人々は身に餘る苦しみ悲しみを偏に觀世音菩薩の溫い胸へ持ち込んだのであつたが、高貴な身に生れた花山院とても、その悲傷に於て凡下の人々と何の變るところがあつたらうか。その花山院が身に餘る悲みを運んでかゝる北國の山間に迄來られたと考へるのは實に、味が深いではないか。

古人の中で一生を旅に過した人といへば、先づ西行、宗祇、芭蕉を思ひ出す。芭蕉は二人

の先人を慕うてゐた「露とくくこゝろみに浮世すゝがばや」と云つたのは、吉野奥の千本にある西行庵のあとをたづねた時であり、「世にふるは更に宗祇のしぐれかな」と吟じたのは旅に出ようとして宗祇をしのんだものである。芭蕉は「旅に病んで夢はかれ野をかけめぐると云つたが、同じ旅に病んで苦しい夢を抱いて死んで行つた人に日本武尊がある。「大和は國のまほろばたゝなづく青垣山こもれる大和し美し——」どはるかに故郷への情を寄せながら淋しい逆旅に冷くなされた尊を思ふと、言はうやうのない傷ましさにうたれる。あの甲斐の酒折の宮で火焚翁との唱和の「にひばり筑波をすぎていく夜かねつる」「かゝなへて夜にはこゝの夜日にはとほかを」といふ單純な言葉に、はるかな旅の思ひを歌はれたのであつたが。又私がいつも哀れに思ふのは『十六夜日記』の筆者阿佛尼の身の上である。彼女はそのひとり子のために所領の安堵を訴へてはるくくと鎌倉に降り、遂にそこで死んだのである。あゝいふやさしい中にも強い心がけの人であるけれども、あの長い平安朝文化の中に育つた人であるからには、どれ程今一度都へ歸りたかつたことであらうか、とうたゝ同情にたへない。しかしその中で日記を残したり『阿佛坊口傳』『夜の鶴』などいふ歌學の書をも

して家道を一子に傳へようとした努力を思ふと、そこに一切の困難にもまけない母性愛の光つてゐることを見、彼女が我々の祖先の中なる永遠の女性の一人であることを思ふのである。

等しく逆旅につくものにも平和な道もあり、怒りの道、憎しみの道、戦の道もある。はるかに都府樓の臺をのぞみ、朝暮に觀音寺の鐘聲をきいて愁の日を送つた道眞の西への旅路は憂悶やる方なき旅であつたであらう。國司の任はてて都へ上る貫之の旅は暴風雨や海賊におそはれて土佐から京へ間にすら幾十日の日を経てゐる中にも一道の平和がたゞようである。母を奉じて芳野にゆき、また母の駕側にて歩してさまぐの物語りし乍ら安藝の國へ歸つたといふ山陽の旅には、人の子の持ち得る限りの満足と喜びとがあふれてゐたであらう。それに比して闇澹たる幕末の風雲の間を、あやふき誰何のがれて京を出で、闇にからうじて大阪を解纜した月照と南洲との薩摩への旅は、白刃をふむ様な緊張し切つた命がけの旅であつたらう。

西行や芭蕉にとつては、旅はそのまゝ彼等の藝術であり生活である。橋南谿の様な人にとつては旅は學問であり修業でありまた道樂であつた。そこから『東西』遊記の様な大きな紀行文が生れた。西行や宗祇や芭蕉はそれらの人々の歩いた道が自然に旅行となつたものであつて、旅行家を以て任ずるものではない。南谿の如きは自ら任じた旅行家である。旅行家からは紀行文が生れる。近代紀行文の大家を以て推すべきものは、徳川時代の橋南谿、明治の桂月、露伴、花袋である。大谷光瑞の『放浪漫記』徳富蘇峰の『煙霞勝遊記』の如きは或は天馬空を行く奔放自適の趣味を以て、或は卓拔警眼の識見を以て文壇に重きをなすべきものではあらうが、純粹の旅行記を以て目すべきものではない。近代旅行家の二大頭目ともすべきは橋南谿と、田山花袋とであつて、南谿の文は叙述の細、記事の奇、文の閑、共に珍とすべきものである。花袋の文は聊か感傷的ではあるが、足蹟の廣きと、表現の文學的なることは遙に南谿に越えるものであらう。

驛路は權者のゆく所、邊土は聖者の住するところとは云へ、古來、罪を負うて貶謫の旅に

出た人々は如何に多いことであらうか。そしてまたそれにかまつて我が文學宗教はいかに豊富にせられたかわからない。「かれひの上に涙ほどびにけり」と古代の人がかこつた程にあじきない旅路を、若し死を前にして辿つたとしたらその山容水色はどんな風に心に映するものであらうか。哀れな平家の貴公子重衡は、その心を以て東海道を二度も通らされてゐるのである。俊寛は死よりも恐ろしい孤獨と絶望との方へ幾百里の海路、陸路を辿つたのである。それに比べると信仰迫害の方は深き感激を以ては見るが、悲愴な感にうたれることは少い。念佛の聲する方はいかなるあまのたまやなりとも自分の遺蹟であると言つた人にはすがすがしい安住がある。我れは日本國の柱なりと宣言してゐる人の上には何物もをかすことの出来ない確信がある。これらの人ははるかに所刑の境界を越えてゐるから流謫は轉居に等しい。けれども謫せられたる宗教家はその謫所によつていかに影響せられたかといふことを考へてみるのも無意味なことではなからう。手近く之を見れば、日蓮上人は流謫そのものによつていよく激成せられた人であり、親鸞聖人は、流謫地なる越後によつて非常に思想的の影響をうけると同時に、家庭の上にも大きな變化を獲た人である。法然上人の如きに至つて

は磨かれたる玉の如き其の人格は、今更境遇の變風土の化によつて動くところもなかつた程
靜にみちたつて居られたのであらう。

眼をあげて彼の山を望み、この綜々の流をきく時、我が心は恍として旅にはせる。そこには
血の涙を流した古人の蹟があり、悲喜歡樂さまざまの今人の生活が展開せられてゐる。

「子川上にありて曰く逝く者かくの如きかな晝夜を舍かず」とまことに生々流轉味はへども
つね心ではなはいか。

(六一三・七)

旅 泊

身は炎熱の都市の中に坐して心は遠い青山白雲の旅にはせてゐる。「遠山無限碧層々」と
いふが、遠い青空の下、ゆけどもくつきることのない旅のことを思ふと、心はそとろに一
脈の清風に吹かれる思ひがする。

昔から旅人としてその生涯をたどつた人は誰々であつたか——そんなことをよく自分は考
へてみる。不思議に我々の祖先の間には、旅に生涯を送つた人が多い。苦しみもなやみも争
鬭も功名手柄も一切をあげて旅に没入して行つた様な人が多い。西行はさうであつた、宗祇
もさうであつた、芭蕉もさうであつた、親鸞の如きもやはりその一人であるといへるだらう。
芭蕉の藝術は、我々の祖國が持つ文學の最も尊いものの一つである。あれ程深く自然と人

生とを見、あれ程高くそれを表現してゐる作品に接すると、頭の下る様な心で幾度も味はずにはゐられない。今、私の窓の前には白いヒメ花が少し許りの花を開いてゐる。その清い淋しい花を見ながら、芭蕉の旅の句について思ひ起してゐるのである。

一つ家に遊女もねたり萩と月

芭蕉が『奥の細道』の半は以上を終つて、越後から越中へ入つたのは、舊曆七月の初めであつた。眼に見えない秋が、もうこの北國の海岸にみちてゐるのが芭蕉には深く感じられた。荒草籬々たる夏草の間を、さまようてきた旅は、いつか秋風が夜泊の袂に入る様な季節に變つてゐる。こゝで泊り合せた二人の遊女があつた。彼女等は越後の新潟から伊勢参宮するとして出かけて來たのであるが、女ばかりの心細さに僧形の芭蕉に向つて同行を頼んだのである。しかし芭蕉は「我々は所々で滞在する旅であるからとても一しよにはゆけない、たゞ人のゆく通りにゆけ、神明の加護で必ず恙なくゆけるであらうから」といつて同行を斷つて居る。これはその折の句である。

この話に關聯して想ひ起すのは『野ざらし紀行』の句

猿を聽く人捨子に秋の風如何に

である。これは江戸を出發して故郷に向ふ旅のはじめに、東海道富士川を渡つた時、三つ許りの捨兒の泣いてゐるのを見て、非常に心を動かされた。しかしどうすることもできず、僅か許りの食物を與へ、万斛の悲憐を胸に收めて過ぎ去つた、その時の句である。その時の心持は文中によく記されてある。芭蕉は此の捨兒に非常に心を動かされてゐる。それでゐて、黙つてみて過ぎ去つてしまつたのである。そこに芭蕉らしい一つの諦觀がある。

遊女の同行を斷つた心にも、捨兒を見過した心にも、一筋のものが通つてゐる。言はず芭蕉の愛は普通の人情よりも、もつと深い天地にあつた。彼等の生命の内部に迄入つて、ともに運命を慟哭する程の深さに於て彼等を愛したればこそ、斷るべき時に斷り見過すべき時に見過し得たのだとも言へる。『歎異鈔』の語をかりて言へば「いかにいとほし不便と思ふとも存知のごとく助け難ければこの慈悲終始なし」である。このことを芭蕉はよく心得てゐる。そこに人生に對する熱い忿懣が深い諦觀となつて動いてゐる。愛よりも大きな愛がある。

野ざらしを心に風のしむ身かな

漂泊を生涯の家とした芭蕉にはいつも秋風の中に裸の身をさらす様な、淋しい、傷々しい
 それでゐて、どこ迄も殻から出てゆく様な心持がある。「野ざらし紀行」の初めのこの句に
 もよくそれがあらはれてゐる。

或る年、深川の芭蕉庵にゐた時、自分で竹をわつて笠をこしらへたことがあつた。紙を張
 つては澁をぬり、紙を張つては澁をぬり、二十日ばかりもかゝつて、蓮の葉の様な、そりか
 へつて、おかしいものが出来た。その中へ讀をかけた。

世にふるは更に宗祇の宿り哉

といふのである。これは、これだけでは一寸わかりかねるが、宗祇の句に「世にふるは更
 にしぐれの宿り哉」といふのがある。その「しぐれ」を「宗祇」に置きかへたのである。か
 りそめの句乍ら、この澁笠に時雨をうけながら、旅の宿りを重ねようとする心が動いてゐる。
 坐つてゐても芭蕉は旅にゐたとも言へるし、旅は芭蕉の故郷であつたともいへよう。それ
 故にこそ、あのすがすがしい、そしてしみじみとした境地が開けたのであらう。

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら

これは貞享元年芭蕉四十一歳の年の暮れである。此の時は名古屋を中心とした門人達の間
 を、此處で三泊彼處で五泊と、さすらひ歩いたものらしく、芭蕉の生涯は實に此の一句に縮
 寫されてゐる。百年を隔てて蕪村は、この句に「芭蕉去つてその後未だ年暮れず」と和した
 が、一介の身を天地の大に寄せ、一瞬の命を無限の宇宙に置いた、淋しい、自由な、不如意
 なしかしひろくとした心が、こゝに流れてゐる。

旅より旅へ——「月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人なり、舟の上に生涯を浮
 べ、馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす、古人も多く旅に死せるあ
 り、予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思やます……」かう芭蕉は『奥の
 細道』の初に書いてゐるが、最後に一人の旅人として、大阪の知邊に病んで死に、近江の粟
 津の松原の邊義仲寺に葬られる迄の五十一年の生涯は、まさに自ら語つた通りの生涯であつ
 たといへる。今我々がその心のあとをたづねてゆけば、人生の觀照、自然の情味、勝れたさ
 まぐの境地に心をひかれて、止るところを知らない。

旅によつて芭蕉を思ひ、芭蕉によつて旅を懷ふ。それなら何故そんなに旅に心をひかれる

のか、その事も自分は時々考へて見る。離合集散止るところなき旅の姿は人生そのものに似てゐるからとも言へよう。旅は日常の雑多紛々から我を放つて、しばらく自由な境地に置くからであるともいへよう。しかしそれよりも、もつとほんとのことは、ゆけども盡きぬ旅は我々をして永遠の汀に立たしめる。その永遠の汀に立つて我れ自らの姿を顧みしめる、その我自らの姿をみる淋しさが、強く心をひくのではないであらうか。

(大14・11)

北山かげ

ひともとの椿の花は咲きにけり幾重の谷のそこひながらに

山ざくら谷をあかるく咲きにけり貴船は山の深きかげみち

世にとほき山のさくらをなつかしみ谷かげみちを歩みきにけり

(昭九・四)

碧 層 々

山の彼方の空とほく

さひはひすむと人のいふ

あゝわれひとりとめゆきて

涙さしぐみかへり來ぬ。

山の彼方のなほとほく

さひはひすむと人のいふ。

山を憶ふ。そして多くの少年のするやうにわたしも若き日に愛誦したあの詩のころを想ふ。随分古い詩だ。少年の頃いかに胸をときめかせてあの詩を口ずさんだことだらう。憧憬

碧 層 々

と悲哀との一つにとけたこの詩は、同時にまた、山そのものの持つ不思議な神秘をあらはしてゐる。夕ぐれの卵色にぼかされた空際をみつめるとき、山はまことに幽遠にして懐しい存在だ。その背後には如何なる世界をつゝみかくしてゐるのであらう。その卵色のほの明るさは、まだ見ぬ永遠のふるさとを示してゐるのだらうか、お伽話にきくやうな神仙の世界の光りなのであらうか。私は今もなほくれゆく夕空に向ひ、ほのかな山の姿に接するとき、夢のやうな少年の心に歸つてゆく。

遠山無限碧層々——同じ山である。しかし此の句にあらはれた山は、ほのかな夕空の下に立つ山ではない。こゝには白日の光が力強くその碧緑を萌え立たせてゐる。力を込めて大地に立つて、はるかに重畳せる波濤のやうな連山をのぞむ現實の廣々とした視野が開かれてゐる。眞夏の光景である。そして遠近の相違につれて色彩の明暗濃淡を異にする深遠な風景である。それだけではない。あの外つ國の詩があがれと夢とを階調とするに對して、この句には理想と現實に關する味識がうちこまれてゐる。私は此句から人生そのものについて多くの教を受ける。それでゐて何と無限の風韻を含んでゐることよ。

山の重なりあつてゐるのは一つの新しい風景美である。たとへば東海道を通つて青嵐ふく濱名湖上から北を望むとき、東西に遠く連なる南信境上の山々、そして山の間からまた山が無限に重つて、少しづつ青藍の度合を異にするのを見た景色。吉野川六田の渡から上流を眺めた時、この清流が流れ出てくるところに、妹山香山などを前景として諸山が錯落と重なりあつた景色。もつと手近いところで私の愛してやまぬながめは、丸太町四條などの加茂川の橋上から北を望んだ時、糺の森よりはるかに北、鞍馬、貴船の中に包んだ北山連嶺のたゞなはる景色である。日によつては嵐氣の工合で速くもなり近くもなり、冬はその頂上に輝く一抹の白雪。あれを見ると京都は山の都であるといつも思ふ。

山について想ふものは川である。その川のさまじくの異つた面かげである。等しく山から出て海に入るものでありながら、これ程異つた個性と表情とを持つたものはない。嘗て益田

川について溯り神通川に沿うて降つたことを想ひ起す。八月の中頃であつた。金山にとまり、翌日は中山七里の景勝を通つて萩原に一泊し、更に半日同じ川に沿うて上り、久々野のあたりで遠く群山の間はその行方を見失うた時は、まことになつかしい思ひをして見やつたことであつた。益田川は大きな溪流である。行つても行つても溪流の趣を失はない。或時は奇岩怪石の間にちよめられて奔湍となり、或時はうち開けた河原を流れ樂しげなさまやきをたてて行路を慰めてくれたものであつた。

宮峠の頂上に立つた時は萩、女郎花、葛花などの秋草が一面に咲き亂れて遠くもたどり來しものかなの感が深かつた。こゝから南に落ちた一滴は益田川となり、木曾川となつて大平洋に入り、北に落ちた一滴は、宮川となり、神通川となつて遠い日本海に入つてゆく水の行方を想ひやつて、立ちつくしたことであつた。さて神通川はまだ高原川と云はれる船津あたりから、もう滔々轟々として、一も二もなくひた押しに押し流れる、ものすごい大河である。深くて暗くて、ほゞえみ一つ見せず、ひた急ぎに急ぐあたり、いかにも裏日本の川らしい川であると思つた。同じをとどひでも育つた場所が異ると、きめもちがへば表情も異ふやうに

川も流域が異ると地質と人文との關係でいろいろな相違が出来る。大和の五條から天ノ辻の天險を越えて十津川の溪谷に入り、三日もこの溪谷を歩いてゐた間は、少しも氣づかなかつた。玉置山に賽して北山川に降り、瀬八丁にいつた時には、たゞこの川の靜かに美しいのに氣をとられるばかりであつた。さて宮井に泊つた翌朝、眼前はるかに滔々として柴舟などを流しながら山狭から出てくる十津の本流と、同じく左から出て合流する北山川とをあはせのぞんだ時、はじめて十津川がいつのまにか白く濁つてゐるのに驚いたことであつた。

多くの旅行家は川口の風景について語ることが少いやうであるが、少くとも或る川に於いては、その河口の特色ある美を忘れてはならない。熊野川の川口の、一面に浮べられた木材の向ふに紺碧の海が見え、その海に三々五々と白帆が連つてゐる様子などは、最も美しい河口の一つであらう。北國では加賀の手取川、越中の黒部川、越後の糸魚川など。手取川の前景に長い橋を置いて、中景の一方松の森と漁村の屋根とを置き、一方には沙丘がずつとつき、遠景に日本海を見た、あの妙にわびしい感じのする景色。黒部の磊々たる大石の磯、荒

涼たる四邊の風物。糸魚川の何處から川が出てくるのかと思はれるばかりに三方屏風の様な高い山に圍まれて、一方がすぐ海になつた氣のつまる様な淋しさ。これらにはみなその川の特質が川口一つに象徴されてあるやうな感がある。

野を行け、野に限りなき美しさがある。武藏野の美しさを最もよく見たものは獨歩であつたらう。ひとり『武藏野』だけではない、彼は『空知川のほとり』に於いて石狩の野の荒涼たる姿をもまた深く味つてゐる。しかし野はいつも寂寞ではなく、また必ずしも荒涼を唯一の姿としてゐるものでもない。和暢好讒、自分の愛誦するもの一つに蕪村の「春風馬堤曲」がある。馬堤は毛馬村の淀川堤である。こゝには溶々と流れる大江があり、春風吹き亘る十里の野がある。

新しい風景として高原があり裾野がある。

たけなすすゞきの中を分けつゝ、思ひもかけぬ方に山の姿を見出す面白さ、遠雷のやうな噴

火口の音をきゝながら、噴煙の行方を見やる裾野の趣。だがほんとうは、野は野の外に景物はいらない。行けども行けども野であり、草原であり、たま／＼赤松の林であり、草の穂であり、百合の花であり、野菊の花であり、そして曲つてはまたつゞく細い徑に疲れた時、草をしいて坐つてにぎり飯をかぢり、空を仰いで流れる雲を見、自然の有する永遠の淋しさに觸れることが出来たらそれでよからう。

自然の美を語るものは光のことを忘れてはならぬ。このあひだ大津の紺屋が關から船にのつて南郷までいつた日は、朝から怪しく曇つてゐた空がだん／＼切れて、時々日が射したりくもつたりするやうな日であつた。私が湖南の風景を特に美しいと思ふのはこんな時である。湖と野と、遠い連山と、長命寺山や三上山などの近い山々と、日のあつた山とあたらぬ山と、紺、紫、藍、碧、さまざまの諧調をなして、一幅自然の繪巻物をつくりあげる。こんな時、顧みると比較長等の山々の緑がまた美しい。その柔かな緑と、穩かな色とに心が慰められる。日光の陰翳が作り出す自然の變化は一つの美しい魔術である。曉のほのかな光を

思ふ時、私はいつも碓氷の曉霧の間から流れ降る溪水を回想する。あのトンネルを越えて上州の野へ汽車がヒタ走りに走り降つてゆく途上、急傾斜の溪間を流れて下る水の刃のやうな清冽な感じ、その白い光つた感じは魂迄も澄みとほるやうなものであつた。

太陽が地平の彼方に去つたあとで、山頂に残す光は此の世のものとも思はれぬ美である。京都に住む人は紫に暮れてゆく比叡の面影を知つてゐるであらうか。日が西山のうしろに入つたあと、一乗寺修學院のあたりも漸く日がかざる様になると、忽然として大比叡は、全山うす紫に變る。それは京都の自然の中でも最も美しいものであるかもしれない。冬、白雪が山頂をおほうてゐる様な時でもあれば、その白雪が忽ち紅紫色に燃え立つのである。そして見てゐると、だん／＼うすれて、やがて灰色の夕が天地をつんでしまふ。

私は勝浦の入江で船の上から熊野の山の夕やけを見た。深緑の山、層々として奥の知られぬ南紀の山々が蒼然としてくれてゆくのである。その時、最も高い山の頂上に残る夕やけの狐色。一瞬にして俯視すれば海上はもうくらく、一瞬にして仰げば山頂の夕焼もまたすであとなく消えてしまつてゐる。後年帝展で、山口蓬春氏の力作「三熊野那智のお山」を見た

時、氏もまたあの夕焼を見たな、と思つた。

自然の感じを二つに分ける。和暢、美麗、可憐なものと、寂寥、偉大、荒涼、豪宕なものとである。近畿の風景は前者であり、裏日本の風景は聊か後者に近い。だが大體に於いて日本の風景が前者に屬することは言ふ迄もない。私はいつも紫にくれる比叡の夕、卵色の美しい西山の夕空に對しながら、その自然の美が人間に作用する媚惑と夢幻と安逸とを思ふ。私はその都度、これは永く止るべき地ではないといふ感を深くする。勿論それはそれや一つの境界ではある。だが私はもつと深刻なもの、沈痛なもの、雄偉なものを求めてゐる。私が裏日本の風景に心をひかれる理由もそこにある。

私はまだ

大漠孤煙直にして

長河落日圓かなり

と歌はれたやうなはてしなく速い光景を知らない。

碧層々

敕勒の川

陰山の下

天は穹廬に似て

四野を籠蓋す

天は蒼々たり

野は茫々たり

風吹き草低くして牛羊を見る。

と北朝の詩人の歌つたやうな雄勁蒼莽な自然を知らない。私が希ふところのかくの如き寒苦にして豪宕なる自然に接し得るのは何時の日であらうか。

私は再び山にかへる。山は實に一の宗教的な存在である。東洋に於いては古代の人々の殘した事實もまたこの事を力強く語つてゐる。聖書を開けばシナイの山極隈の山は最も神に近い山であり、大無量壽經にある「猶如雪山等一淨故」の句は雪山が印度人にとつて如何なる

ものであつたかをよく語つてゐる。古代支那の帝王は、泰山、嵩山、衡山、華山の四嶽に於いて天を祀つた。廬山といひ、五臺山といへば支那佛教の源流であり淵藪であり、高野山といひ、比叡山といへば全日本佛教を見るの概がある。

特に山に分け入ることその事を目的としてゐる宗教がある。嘗て飛驒の濁川で遙かの溪から出てくるあの白衣の御嶽行者のならず鈴の音をきいた時、何等の説明をもまたずして山の神祕教に同感することが出来た。關西では今もなほ年々に多くの人の峰入りする大峰山がある。その外、北國の立山、羽後の三山など數限りもない諸國の靈山、行場などの存在。之を現代に翻譯して云へば所謂日本アルプスへの登山熱など、山が人間にとつて如何に強い牽引力を有してゐるかを語つてゐないものはなす。

私はあのあはれにもゆかしい三十三番の札所のことを思ふ。そもぐの那智山をはじめ、最後の美濃の谷汲山に至るまで、京都の近郊だけでいつも攝津の勝尾寺にしろ、西山の善峰にしろ、醍醐にしろ、岩間いわまにしろ、深い谷底や峰のほとりにその處を求めたものではないか。身と心とに傷手を負うたものは、深い自然の奥へたどり入るのでなければいやされない

のではないか。

大和の三輪山や信濃の諏訪のやうに山そのものが神體として拜された有史以前の古代からリュックサツクを肩にし、アルペンストックを杖にして登つてゆく現代まで、いつも山は人間に向つてよびかけてゐる。

或人にとつては山は孤獨と沈黙との道場であり、また或人にとつては山は置くにところない、やるせない身を捨てにゆく谷である。そして或人にとつては、こゝこそ克服、超越、不測の戦闘に身を鍊る豪壯雄偉なるカナトコである。

だがそれだけで山の意味がきたのではない。山の意味はなほさうした言説を越えた彼方にある。層々として青雲のそきへのきはみまでたゞなはつてをる様に、山が人間によびかける聲は、説明や理解の彼方にある。その聲に動かされて原始人は山を拜み、中世人は山に修行し、現代人は山を征服しようとする。イタリアの詩人がうたつたのも、支那の禪僧が説かんとしたのも、さてはまた我が日本武尊が「やまとは國のまほろば、たゞなづく青垣山こも

れるやまとしうるはし」と最期の時に咏嘆したのも、みんなさうした山の呼聲に動かされてのわざではないか。

私は、山奥に寺をたてたり、山深く分け入つて身を苦しめたり、山ふところに身を捨てるやうにして順禮した、中世の人々の心に限りなきあはれとまこととを感ずることが何よりも深し。

自然はいつも人間を癒し、人間を慰め、人間を高める。山はいつも沈黙の教師であり、無言の指導者だ。では山には何があるのかと再びたづねてみても、やはり私は答へることが出来ない。「只在此山中雲深不知處」——古人の言葉を以てそのまゝ結びの言葉とする。

(昭三・七)

山の追憶

校庭のポプラの緑が日に／＼濃くなつてくると、愛宕北山の嵐氣が著しくめだつて來ます。その頃になると、心の底に眠つてゐた山戀ひの情が急に眼をさまして、出かけよ出かけよ、といつて私をそゝのかすのです。

この頃は毎朝楊枝をくはへながら、うらの青桐の下に立つて見上げると、朝の青空に、青年の様にのび／＼と大手をひろげた青桐の葉までが、夏の來たことを語つて、私を若き日の心にひきもどしてくれます。

旅を戀ふる心の人一倍深い私は、日常責務の生活の間にあつても、いつも旅を想はぬ日と

ても無いくらゐなものです。地圖を見ることが紀行を読むこととは、狭い日暮しをしてゐる私にはこよない楽しみです。まして夏の休の近い今は、そこはかとなき旅の追憶や豫想でいっぱいです。でも、さて夏が來てみると、繁累の多い、貧しい私には、とても思ふまゝの旅などは出來はしないのですが。

でもどんな中からでも、夏休には旅行をしたいものだと思ひます。去年の夏はある書きものに没頭して、どこへもゆけなかつたのですが、それでも、死にかけてゐた友人を三河の海岸に見舞つたついでに、豊橋から十里山の中へ入つたところにある鳳來寺山へ登つたことは忘れ難い回想です。裏山をひとり歩いて下つて、淋しい鑛泉に身をひたして、「京都から遠く離れて來たなあ」と思つたりしたことも懐しい旅の心です。

その時、會ひたいから來てくれといつた友人も秋の來るのも待たずに死んでしまひました。歌の道に於いていみじき天分を持つて來たこの友は二十九歳の若さで母と弟妹とを残して死んでゆきました。最近友の遺稿を一巻の歌集として出版しましたにつけても、友に招か

れたのが機縁になつて行つた三河の山のことか思ひ出されます。

名山大水を訪れるのも旅の喜びではありませんが、たゞ何かなしに雑草の中に身を置くといふことも夏の喜びではありませんまいか。

いろ／＼な昆蟲や雑草の中に身をなげ出して、しみ／＼と青空を見上げる様な時——さうした時を私は時々持ちたいと思ひます。より高くより賢くならうとすることが人間の欲求の一つではありませんが、その反對に、高き立場をすて、賢さを忘れて、草樹蟲魚と共に身を置き、大地の上に生みつけられたものとして、地と呼吸を合せることも、必要なことではありますまいか。

私はしかし、實は草深い淋しい山村に生れて、蚊柱や蛇やほととぎすと一しよに育ち、ほたるぶくろをちぎつたり、いたどりを折つたりして、大きくなつたものですから、こんなことをよけいに思ふのかもしれませんが。

雑草といへば、さうした雑草の中に働いて雑草の中に死んで行つた母のことを思ひ出します。母は薄倅な生涯を私一人を育て上げるために苦しんだやうな人ですが、私自身がどうかかうにか一人立ちが出来るやうになつた時は、その母はすでに淋しい田舎の雑草の下に骸をうづめてしまつたのです。

青春の日——それは私にとつては悲しみといきどほりの日でした。おのれと世とに深いきどほりを懷いて、たゞひとり益田川に沿うて幾日も／＼歩きつゞけてゐた日のことを思ひ出します。飛驒の宮崎に立つた時には、八月のなかばで、秋草が咲き亂れてゐました。その秋草の中に坐つて、遠い都の方をおもひやり、またふるさとの方を見返つて、惆悵としてなげいたものでした。

一 昨年の夏、高野の山に若き人達と共に一週日を過したことも、今は楽しい思ひ出となつてゐます。千年の苔むした奥の院の並木道を逍遙した時の、すこいやうなしづけさ。女人堂

山の追憶

の朝霧の間から、遠く葛城連山の一角を望んだ時は、はるかにおもひ、大門の夕に立つて、カナ／＼の鳴く聲をきく乍ら、紀の川の溪谷を俯しのぞんだ折の一縷の郷愁——さうした心にひかれつゝ今年もまた高野へゆきたいものだと思つてゐます。

山　は私のふるさとの山です。私のふるさとは山なのです。だから轉々として定めぬ旅の假すまるの間にも、心はいつも山の方へ飛ぶのです。山は遠い、山は青く高く澄んでゐる。山の彼方にはいつも私のふるさとの山がある。——遠い西歐の詩人のうたつたロマンチックな心が今も私の胸の中には巢喰うてゐるのでせう。

(昭六・七)

雲悠々

山の彼方の空遠く憧れる心——それは少年時代以來、今もなほ、いき／＼と私の心に生きてゐる白日の夢だ。かへりみれば私は今日まで、さうした夢にひきつけられて歩んで来たやうなものだ。實學の立場、窮理の立場から見たら、それは他愛もない、愚かしい生涯であつたかもしれない。しかし私自身は、今日までのさうした半生を、聊かも徒勞であつたとは思はず、後悔しようとも思はぬ。恐らくこれよりのちも私は山を想ひ水を想ひつゝ、そこに寓されてゐる自然の悠遠なるものに心ひかれてその方へ／＼と歩んでゆくことであらう。そしてやがてその自然の一隅の一塊の土の中に骨を埋めることを以て足れりとするであらう。

朝、眼を覚ますと、窓前の槻が枝を一ぱいに擴げて、深い緑の蔭をつくつてゐるのが見られる。私の等持院のかりすまゐは不便な家であるけれど、この一もとの槻にいかにも慰められることか。立つて窓の邊によれば、その枝の間からはるかな比叡の峰が、うすく藍色に澄んで聳えてゐるのが望まれる。私は尊敬してゐる故人にあふ様な、或は心あうた友にあふ様な懐しさをいだいて、朝な夕なこの山をながめる。

夏の窓邊に持つ一もとの樹は、私の心の中にも朝ゆふの蔭をつくつてくれるのだ。

夏くるごとに、二つの異つた願ひが、私の心の中にさかんにきそひおこる。この夏こそは心ゆくばかり本をよみたい。これがその一つである。平生買ひ込んで讀まずに居る書物、借りて讀みたいと思つて手帖にしるしつけてゐる書物、さうしたものごとくふえてゆくのだ。平生讀み得る書物は讀みたいと願ふ書物の何分の一かに過ぎぬ。懶惰な私には夜を徹して書を読むといふやうな熱心が足りないのだ。それにたま／＼その心掛を起して、睡眠不足を重ねればすぐに頭痛を起して、一日は堪へ難い苦しみ身に捧げねばならぬ様な持病を持

つてゐる身には、讀書も思ふにまかせぬ。年が年中飢ゑたやうにしてゐるものだから、夏休には……といふ願ひが、ことさらに強いのもかもしれぬ。

この夏こそはどうかして遠い旅に出たいものだ。これがその二つである。人一倍山水煙霞の性癖を持つてゐる私には、旅は生の喜びそのものだ。この頃の郊外に出て、あの層々として疊なはる遠山をながめると、限りなき旅への思慕に動かされる。山の彼方谿谷の彼方にあるまだ見ぬ村里まだ見ぬ山野が強く私の心をひく。日頃旅行の便宜を持たぬものにとつて夏休こそ、さうした希望をみたしてくれる唯一の時なのだ。だからこの夏こそはとの願ひがごとにつよいのであらう。しかも讀書と旅行とは兩立せず、況んや旅行の如き、いろ／＼條件がそろはねば出来ぬことは、来る夏も来る夏も空しき願ひのみに終ることが多いのであるが。

切なる願ひを抱いてをれば、いつかは達し得る時がくる。かう私は思つてゐる。しかし達せられぬことも多い。達せられるられぬは問ふところでない。我々は願ひを持たずにはをられぬ。願ひそれ自身が一つのいのちなのだから。

願ひの達せられぬといふところに、人の世のことは我が思ふまゝにはゆかぬものであるといふことが強く知らしめられる。したがつて、たゞ願ひが達せられたといふことは、決して我が力ではない。それは先輩、師友、世の人々の有難きめぐみによるものと、私は心ひそかに感謝を捧げる。

奥箱根山、富士と富士山麓、三寶島の鳴くなる三河鳳來寺の山、高野の山、長州の萩、豊後の日田耶馬溪、朝鮮の慶州、金剛山など。これらはかねてゆきたいと切に願つてゐたのが願ひかなつてこの数年の間にゆくことの出来たところである。

もしまた願ひのかなへられる日が来たら、今にもゆきたいと希つてゐるところは、伯耆大山、松江、隠岐の島。白河の關、勿來の關、平泉、松島、月山、湯殿、羽黒山、象海のあと、羽後の山寺立石寺。十和田湖奥入瀬の溪、津輕海峽を越えて大沼、洞爺湖、白雲峽、狩勝の高原。

旅に出ると日がなかつたり、金がなくなつたりして、惜しいとおもひつゝ如何とも出来ぬことも屢々ある。

去年の夏、湖南線を公州から京城へ歸つた途中、そこには大毎の朝鮮八景の隨一に選ばれた内藏山、白羊寺の幽邃境があつたのであつたが、一日の餘裕があつたらと思つたけれど、如何ともすることが出来ず、雨雲のかゝつた翠巒を遙にのぞんで、通過したことであつた。

これも去年の夏のはじめ、日田から耶馬溪へ入る途中、英彦山を遙かの雲際に望見しつゝやはりうらみをのんで、麓をとほり過ぎ、山は空しく白雲の揺曳するに委せたことであつた。耶馬溪といへば、奥耶馬、新耶馬といふのがよいときゝつゝもえゆかず、羅漢寺へさへも賽することが出来なかつたのは心残りの多いことであつた。

これはずつと昔のことになるが、十津川の峽谷を下つて大和から熊野新宮に出た時、あの時、どうして本宮と那智とを訪れなかつたのかと今も残念に思つてゐる。まだ心なき少年時代のことであつた。その時同行の友は、そののち長い歐米の旅をつゞけ、歸途には印度の奥地ベンジャールまでも行つて、健駄羅美術發祥のあとをさぐつて自慢話にしてゐたのであつ

だが、今は不歸の旅に出かけてしまった。

夏の喜びは、人間のうぬぼれを忘れて、草木蟲魚とともに大自然の懐に一つに融けてゆくところにある。

去年の四月、今の家へ移つて、しばらくしたある夕方であつた。裏の方に「コロコロ〜」といふ珍しい聲がする。「おや、蛙が鳴いてゐるぜ」私はかう思つて耳を傾けた。それは幾年にもきゝ忘れてゐた蛙の聲であつた。裏の竹籜の方でないものであつた。私はこの聲を私の新居に於ける第一の有難いものにおもつた。

野に出ると、雑草がさかんに成長してゐる。草をわけて歩いてゆくと、何だか自分が草の精になつて友達のところへ遊びにゆくやうな氣がする。小椋の池のほとりを歩いて、百姓の刈り乾してゐる眞菰の香をかいだとき、あついで盛りの道に、さかんに鳴きたてるよしきりの聲をきいた時、さうした時、太陽の下に自分といふものを投げ出して、何もかも忘れて呼吸してゐた我であつた。

比叡山にも久しくゆかない。近く出かけていつて、あのボン〜といふぬけた様な筒島の聲でもきいてこようか。

(昭一・六)

八月行旅

わがゆくは威竟北道はるかなる雲の下への青き山なみ

島の上に浮ける白雲しづかなり青空の下の元山の港

月よみの光はふかく射すものかこゝはから國群山の港

二十七年めにあひたる友と語りつ夜をふかし居れば月射しにけり

いまはとていねむとおもひわが入れる蚊帳の中ふかく月さしにけり

(昭一四・八)

旅と風景

遠いものに憧れ、高いものに憧れ、奥深いものに心を惹かれる。少年時代には少年時代の憧れがあり、青年時代には青年時代の夢があり、壮年時代にはまた壮年時代の夢がある。人は死ぬまで何かの夢を持ちつづけるものなのであらう。

私にとつて「旅」は最もつよいあこがれである。一生を漂泊の間に過ごした西行や宗祇や芭蕉の魂が、私にも傳はつてゐるのであらう。或はまた至るところに美しい風景を展開して見せてくれる我々の祖國の風土が、このやうにわたしをひきつけてやまぬのかもしれない。旅をおもふことは楽しく、旅を語ることも楽しい。

城といふものが、昔の名残りとしていたるところの町に残つてゐるといふことは嬉しい。それはその地方の歴史をおもひ出させるばかりでなく、その町々特殊の景觀を添へる。若葉の頃、湖畔を旅するものは、彦根城の燃えるやうな新緑にかこまれた天守閣の美しさを知つてゐるであらう。夕方山陽線を通過する人は、ほのあかるい空を背景にして、くつきりと聳えてゐる姫路城の美しさをおぼえてゐるであらう。白壁に塗られた姫路の城が白鷺城で、黒くかこまれた岡山の城が烏城と呼ばれてゐることもおもしろい。中國筋を旅すれば、車窓近くに見える福山の素樸な城もなつかしく、遠く森の中に見られる廣島の城もなつかしい。一望の大平原の中に營まれた大鎮には、そこにふさはしい大きな城がそれ自體一個の山の如く巍然として聳えてゐる。濃尾の平原を壓する名古屋城、攝河泉の野を睥睨する大阪城などがそれである。和歌山城の天守閣に登つて、黒潮寄せる大平洋を脚下に眺めるのは壯大な景觀であるが、名古屋城の上層に立つて、北に信飛の連山かすかに連るのをぞみ、南に平原と海と相接するところ縹渺として樹りなきをのぞむ景色もまた大きい。ことに、名古屋城や大阪城に登る時は、脚下に近代的大都市が異常な發展を以て息づいてゐるのに不思議な緊張を感じ

じさせられる。

嘗て在つた天守閣が亡び去つた後、郷土の歴史を追想せしめ、風土の美観を添へるために巨費を投じて高閣を營むことは、たゞに大阪城ばかりではない。岐阜市のうしろ巖々たる石山の頂上に美景を添へてゐる稲葉山城もある。或は近年建てられた奥美濃郡上八幡（じやうはちまん）の城もある。深い溪流に臨んで翠巒の一角に建つてゐるこの白堊の天守はなかく美しい。

朝鮮には岩山が多い。日本の岩山のやうに多くの松にとりかこまれてゐることもなく、突兀として空際にそび立つてゐる。朝鮮ではさういふところによく亭閣を營んで、文人畫風の景致をそへてゐる。それは朝鮮式の四隅のピンと思ひきり反りかへつたたもので、太い朱塗の柱の上にさうした屋根があるのがいかにも面白く、岩山の一角に何ともいへぬ調和をしめしてゐる。木浦の儒達山（じゆたつ）の上や、扶餘の落花巖の上や、平壤の牡丹臺や、至るところで私はそれを見た。

満洲はひろがりの國で高さの國ではない。その中に僅かに營まれた高いものに心をひかれ

る。

遼陽の白塔、奉天城外の四周にある喇嘛塔、小北邊門外の佛塔などがそれである。近よつてみると大きく高いのであるけれど、周囲の地があまりに廣いので、近よるまではさのみ高いともおもへぬ。満洲名物の強い砂塵の濛々と吹いてゐる日に、きたない町の中をとほつて、半ば壊れた西塔を見に行つたことをおもひおこす。

塔といへば一基の塔でも、古人の信仰のあとであると思へば心をひかれる。吉林の北山の山頂に二基ならんだ一丈ばかりの層塔、溶々として山下を流れてゐる松花江を望みみた眼を移して、あの塔をとほく見た時は、何か身に沁むやうなおもひがした。

身に沁むといへば、新京から奉天へかへる夕ぐれ、鐵嶺郊外の長く南北につゞいた山の端に一基の古塔が遠く空際に建つてゐるのを見た索莫たる景色、まことに心に沁むものであつた。私は古い遼代の文化をおもひ、當時盛なりし佛教をおもひ、たつた一人の敗殘の英雄の如く建物もなく、樹木もない兀山の上に踰躑として立つてゐる眼前の古塔に限りなきおもひを寄せたことであつた。

川といふものは面白いものだ。同じく水が流れるにしても生ひたちがちがへば氣質もちがふ。京都では大原貴船あたりの溪流の延長のやうな加茂川と、磊々たる石を含んだ野川の趣ある桂川と、水勢鋭く鳴つて流れる宇治川と、源の遠く流域のはるかなことをおもはせ、白沙の川原をいたるところに展開してゐる胸廣くゆたかな木津川と、こんなにも異ふものかとおもふ。

一つの川でさへも、出てくる谷が異れば一つ一つの支流には異なる味のあることを知つた。昨日まで私のゐたところは、長良川の上流である。上ノ保川といふのは溪がひろく、朗らかにさら／＼と流れてゐるが、龜尾島川といふのは狭い谷のおくから、狭い川瀬の間を何か感情をこらへた様にして流れてくる川だ。

川は、そこに棲息する魚類さへもかへすにはおかぬ。同じ琵琶湖原産の鮎を放流するのに川によつてそれ／＼風味のちがひを生ずるといふ。丹波山國の鮎と、美濃龜尾島川の鮎とはその形さへも異なるのであつた。近畿の鮎の風味がこまやかなのに對し、庄川や神通川の鮎の風味があらいと云つた人のことばもうなづかれる。

景觀として最も大きな役目をしてゐるのは川だ。上流に趣をなす川もあれば、中流に於いて岩に激したり橋がかゝつたりして趣をなす川もあり、河口の海と相接するところに懐しい地方色を見せてゐる川もある。朝鮮金剛の萬瀑八潭や、日本アルプス内の黒部上流、梓川などは上流美の代表者であり、尾張犬山の木曾川や、豊後日田の筑後川は中流美のすぐれたものである。河口の趣にいたつては、加賀の手取川や越後の姫川のやうに、わびしさを以て趣を成すもの、淀川や隅田川の様に大都市と結合して、都市美觀の一部をなすなどさまざまであらう。

縷々としてつきることなきは、旅を語る時の私の癖である。語ることをよるこび、聞くことをよるこぶ。話のたねがつきれば旅を持ち出して日のくれるを忘れるのである。

(昭一一・八)

水 溶 々

麻の葉が畑一ぱいに重^{かさ}つてゐる、いかにもすく／＼とびてゐる。それにつゞいてゐるのが馬鈴薯^{じゃがいも}だ。あを／＼した葉をしげらせまつ白の花を咲かせてゐるのが、丘のやうになつた畑一めんだ。麻と馬鈴薯とをつゞけるやうにして、畑の畔に一系列の立葵が開きかけてゐる。白と紅の花が咲いて上になるほど蒼になり、小さい固い蒼になつてゐる。葵のさきは、空に向つて思ひきりのびてゐる。この丘の畑を越えてむかふには、遙かに青々と連つた山々——初夏のすが／＼しい朝つゆが、そこら一めんにとぼれさうだ。

夏のはじめ名古屋まで旅した時の印象二つ。

野の中に若葉をつけて立つた四五本の立樹、そしてひろ／＼とした緑の畑。その樹立のかけに捨てられたやうに立つてゐた小さい鳥居の朱の色の美しさ。雪の松尾神社に詣でて暗緑と白と朱との階調の美しさに心を惹かれたことがあるが、これはまたそれと異つた、華麗とも可憐ともいひやうのない、若緑と朱とのあかるい調和の美だ。

關ヶ原を東すると、ほのくらしい若葉のしげみを、車窓すれ／＼にして通る。とある森かけの雑草の中に咲いてゐた薊がふと眼にとまつた。あざみはきわどい花だとおもふ。あらい素樸なところが清純な野の乙女のやうでもある。しかしどうかすると、最も頽廢した深刻な年増美の持主のやうでもある。若葉のかけの雑草に埋もれるやうにして咲いた一株の薊を、この時程美しいと感じたことはなかつた。

里川はいゝ。夏がくればどこもかしこも雑草に埋もれてしまふ。あるところでは揚が川のおもてをおほうてしげり、あるところでは葦やまこもが茂りあつて水をかくしてしまふ。またあるところではせまい川一ぱいに水があふれるやうに流れて雑草をひた／＼とうかべてゐ

る。さうした雑草の中に、瑠璃の様に澄みわたつた青空のかけを見つけて驚くことがある。それは溶々たる初夏の野の喜びである。

田の間に池があつたり、畑のかけに川があつたり、そして晴れわたつた青空が、草の間から明るい瞳をみひらいてくれる——かうした野をゆく日は楽しい。

清新な野趣と若葉の憂鬱と、一時に感じさせるものは栗の花だ。一人で遊んでゐる山の子供のやうな花。甘い香の蠱惑で人をつゝむ森の精の様な花。人情を非人情でつゝんで俳諧に興じてゐるやうな花。秋づけば、あの不思議な形の柴栗が我々の心を捉へて、譬たかく秋をつけてくれるやうに、この白いとりとめもない花の穂は、我々に夏のおかしさを満喫させてくれる。今年の夏はこの栗の花を二ヶ所のみた。名古屋城拜観にまかり出て、天守をくんだり夕方よく手入せられた芝生の間をあるいてとある一角にくると、そこにふさ／＼とたれる様にして白い栗の花が咲いてゐた。それが、城といふやうないかめしい建築物を背景にしてこよなくふさはしいのであつた。昔ならば、出陣の合圖が鳴りひびいて、折から駆けつけた、

黒具足の老武者が、この花の下で、足鞋の緒をしめなほしてもゐるべき趣である。

一日は石清水に赴いた折、あの男山の隨所に咲いてゐたのが栗の花であつた。山のうしろへあるいてみたなら洞が峠や、圓福寺あたりまで竹やぶのかけや、家の軒にまで咲いてゐるやうな氣がした。放生川に水草がしげりにしげつて水のおもてをかくし、東西の車塚に栗の花がこぼれるといふのが男山の夏景色だ。

山百合の香に眼さめる。草の葉の食卓に向つてゐると忽ち雲がかゝつて、前に座つてゐる者の顔も食卓も自分も、みんなつゞまれてしまふ。一瞬にしてはれる、山風が渡つてくる、すゞきの葉の露がバラ／＼と音たててこぼれる——。

百合の美しいのは三河以東の山地、大きくて匂が高く、咲いたさかりには山が白く見えるほどだ。鳳來寺山、はこね舊道、精進湖から富士川に出る道、いたるところで私はこの山百合の美しさに立ちどまつた。

西にはあゝした大きな山百合はないやうだ。しかし小さい笹百合の野趣もまた忘れ難い。

いつか比叡山から五六本ぬいて来て、花瓶に投げ入れておいて、来る客／＼を少なからず喜ばせたことがあつた。花屋に賣つてゐるとどんな美しい花も、あの笹百合一本の我々にもたらず味を出すことは出来ないのだ。

盛夏の趣は江山相會するところにある。山は翠巒におほはれ、大江が溶々としてその麓を流れるならば申し分がない。

鶴沼の驛から、松の梢を透して犬山城をチラと望んだ時、これはいゝと思つた。美濃太田から流に沿うて下つた時、松と巖と、滔々溶々たる江流とをすばらしいと思つた。滔々溶溶が一轉して溶々にならうとするところ、そこに忽然として中空に聳えるのが犬山城だ。

東海道をゆく人は、岐阜の稲葉山城に氣付くであらうか。あの嶄巖峻峯に配した松の美しさ。その絶頂はるかに見える小さい天守閣。麓には長良川が溶々として流れ廻つてゐるのであらうけれど、遺憾ながら遠くからは見えない。

朝鮮では、江山の景致のためによく山嘴巖頂に亭をたててゐる。すみのそりの強い趣のあ

る亭が、岩山には實によく似合ふのだ。木浦の儒達山頂の閣は長汀曲浦に影を落し、扶餘の落花巖上の小閣、浮山の閣は白馬江の長流に影をひたしてゐる。平壤の牡丹臺の閣、浮碧の樓などは大同江に倒影してゐる。これに對比すればやゝ變化に乏しいうらみはあるが、稲葉山城などは後修ではあるが日本の爽快な風致の一であらう。

東では、廣瀬川に影を浮べる青葉城を知らぬを遺憾とする。千葉の鴻の臺は、いさゝか乾坤日夜浮ぶの趣がないでもない。たゞ残念なのは、里見氏のたかどのは八犬傳に描かれたのみで、あの丘陵の上に立つて利根の支流に影を落す程の高閣の無いことである。

岳陽樓に登つて長江の大觀を恣にすることを得るのは果して何時の日であらうか。

(昭一一・八)

ほととぎす筒鳥

天幕の構築が終るのをあひ圖に、みんなその邊の様子を見に出かけていつてしまつた。私は波打ぎはに一人で腰ををろして、昨日からの行程をもう一度心の中でくりかへしてゐた。

昨日、冠ヶ岳の下の幕營地で朝飯をくつてゐると、冷々とした水滴が頬をうつて、雲が草を敷いた我々の食膳の上を通つていつた。濃い霧が來たといつてゐるまに、眼の前の樹立も見えぬやうになつた。かと思ふとすぐにまた晴れてとほい青い山々が見はるかされた。

昨夜キャンプファイアーももう終りになつた頃、とほくの森から、澄んだ勁い音色で、ブツポー、ブツポーと鳴く鳥の聲があつた。それが佛法僧であるといつて、冠峯樓の男衆からきかされた時は、私は心に泌みて嬉しかつた。——さうして今日は大湧谷を越え、湖をわた

つて、こゝまで來たのだ。

雲が湖の上をおほうてゐた。夕暮の蘆の湖は波もなく、あたりはしんと静かであつた。

私のうしろには舊東海道の新並木が深々とたちならんでゐるのが感じられた。

テツペンカケタカ　不意にうしろの樹の間からひびいてくる強い聲が私を驚かせた。テツペンカケタカ！　テツペンカケタカ！　男性的な太さと、山氣に澄んだすがすがしさとを持つた聲が、つゞけさまに私の心にひびいた。

私は今でもあのほととぎすの聲を忘れることが出来ない。

浄土院のうらあたりから道は急に深山らしくなる。名も知らぬ夏草が一めんに葉をひろげて道の兩側をおほうてゐる。双輪棠のところから道は一段と細くなる。道の中まで青い草だ。私は雨にぬれてしつとりとした草をふんで歩いてゐた。時々何の木か、白やほの紫の花を木下間に咲かせてゐる。しろもじがきが華な枝から柔い葉をひろげてゐる。大きな椴櫨の梢に雨霧がたゆたうてゐる。比叡の山は都に近いことも忘れ、夏であることも忘れた私は、いつ

までもいつまでも夕ぐれの山路を辿るに餘念がなかつた。

ボンポーン。ボンポーン。筒鳥だ。筒鳥の聲だ。それは何といふ佗しい、たよらない聲であらう。それはまた何といふ超越したトボケた聲であらう。筒鳥はお釋迦様の弟子になつても何一つ學ぶことが出来なんだ樂特のやうに、自分の愚かさを悲しんであゝして鳴いてゐるのであらうか。それとも昨日までの浮世の苦勞をエ、まゝよと打ちやつて、今日は裸になつてはみたものゝ、その淋しさにたへずして、あゝして鳴いてゐるのもあらうか。

晩に黒谷の寺にとめてもらうて、うすぐらいランプの下に食事をしてゐたときにも風呂桶の中に身をひたして、サラサラと流れる筒の水音をきいてゐた時にも、私の耳にはあいつゝ鳥の山氣にみちた空漠無邊の音色がいつまでもひびいてゐた。

(昭一三・七)

からたちの實

夕方背戸に立つてゐるとゴソゴソと物音がする。塀の外をのぞいてみると人がゐて、枳殻の實を採らせてくれと斷りを言つた。何にするのかと聞けば神経痛の藥になるのだといふ。郷里の母が神経痛でねてゐるといふたよりを聞いてゐたところなので、耳よりの話だと思つた。

今日はいゝ天氣だ。午後はとりわけてよく晴れてゐた。晩秋とはいへ、帽子もかぶらず外に立つてゐると暑いくらゐだ。私は一本の竹竿と、紙函とを持つて、からたちの籬に沿うて歩いてゐた。

からたちの實はもう大分落ちてしまつて、まれにしか残つてゐない。たまたま見つけたの

からたちの實

を竿につくとすぐコロリと落ちる。落ちたと思へば、あのからみ合つた枝のどこかへひつかかつてしまふのである。それを突つけば、黄色になつた葉も一しよにパラパラと散つてくる。枝の上にはどこまでも廣い碧空が澄みわたつてゐる。

紙函の底にたまつた小さい圓い實。これは食ふことの出来ぬ、従つて子供らも顧みない、木の實仲間の能なしだ。二本の指で輪をつくつたら、その中を通りぬけるくらゐの大さしかない固いコロコロした實、それにうぶ毛の様なものがついてゐて、妙に素朴な子供々しい感じがする。稻刈の間田の畦などに草やトンボを相手に遊んでゐる小童といつた感じだ。フト氣づくとはのかな柑橘のかほりがたゞようてゐる。あの苦味のあるほのかな香が。

私は遠く過ぎ去つた初夏の日を想ひうかべた。五月雨の霽れ間を人目を厭ふやうに咲いた小さい白い花、恐らく見る人も無いやうなあのからたちの花を想ひうかべた。それは隠者に育てられた内気な少年の様な花だ。私は毎年夏がくると、あの淡泊な世づかぬ花を愛したものだ。

あの花からこのマルマルした實になつたのだ。花が人眼にこびることを知らぬやうに、こ

の實がやつぱり秋の能なしなのだ。私はすっかりこの能なし小僧が好きになつてしまつた。コロコロと地にころがるのを追ひかけながら、私は楽しかつた。

考へてみればこの能なし小僧の親は、年中澁面をつくつてくらしてゐる厭人主義者だ。どんなものが近よつてもニコリともしたことはあるまい。そのくせ人間が彼に與へた持場を、不足一つ言はずにいつも忠實に守つてゐるのが彼だ。彼はアレキサンダーを拒絶したチオゲネスのやうな意固地と、老いた柚人のやうな愚直さとを一しよに持つてゐる不思議な存在だ。私は竿と紙の函とを兩手に持つて、廣い校庭を一廻りしてしまつた。私は紙函からくるほのかなにほひをいつくしみながら書齋に歸つて來た。

草・人間・虫

芭蕉の自然観照の眼は、碧空のやうに澄みきつてゐた。だが、それを冷やかなもの、静かなものと一概に考へるなら間違である。芭蕉のいのちが自然と交流する姿は、いはゞ冷たい熱、燃え上らぬ焔とでもいふべきものであつた。芭蕉の文學が我々に迫る力は、かうした潜在からくるともいへる。

芭蕉の眼にとまるものは、大きなけばけばしたものではない。大きなもの華やかなもの、蔭にある、小さいもの淋しいものであつた。

よく見ればなづな花咲く垣根かな

山路来て何やらゆかしすみれ草

何の木の花とは知らず匂ひかな

さびしさや花のあたりのあすならう

などの句を見ると、大自然の生命の流の、これらのとりとめもない草や木の上から、何ものにも増して深く、我々の方へ流れて來るのが感じられる。

芭蕉が自然を凝視する時、人生そのものも亦山河大地の中へ没入せしめられた趣がある。

蕪村は之に反して、人生そのものを主材としてをる。蕪村が人間の所作を咏する時、山河大地は退いて、背景としての分に甘んじて居る様に見える。

小豆賣小家の梅の蕾がち

商人を吼ゆる犬あり桃の花

青梅や微雨の中ゆく飯けむり

岩倉の狂女戀せよほととぎす

といふ風に、面白い句は皆人事にからんでゐる。

草・人間・虫

蕪村くらの人間の營みの上に詩を見た人は少ないかもしれぬ。そのみならず、蕪村にとつては庶民の可憐な生活そのままが詩であつたのだ。我が古今の文學の中でもたぐひまれなる自由詩「春風馬堤曲」一篇は實に雄辯にそのことを語つてゐる。

一茶は人間に深いいきどほりと、うらみを抱いた男だ。それ故に一茶は草木鳥獸に深い同感を寄せたのだともいへる。だがそれは一面の見解にすぎぬ。一茶には草むらの土にまみれながら蟲けらと一しよに育つたやうなところがある。そこまで考へてゆかねば、一茶の句にみちてゐるあの草木鳥獸に對する同胞感は十分に説明出來まい。

すつぽんも時や作らん春の月

おれとしてにらみくらする蛙哉

竹の子と品よく遊べ雀の子

鶯にまかり出たよひきがへる

清朗な芭蕉、絢爛な蕪村に比べると一茶の文學は非常に土臭い。そこに一茶の持味がある。

(昭六・四)

山河大地

昭和二十一年十一月二十日印刷
昭和二十一年十一月二十五日發行



定價 金十八圓

著者 岩見 イハミ 護 ゴ

京都市花屋町西洞院西

永田宗太郎

會員番號A二一四〇〇六

發行者

印刷者

田中文功社

代表者 田中幾一郎

發行所

永田文昌堂

京都市下京區花屋町西洞院西

電話下六六一番
振替京都九三六番

992
283

圖書集成醫部全錄

年 月 日 / 07

閱覽濟

終



Small vertical text on the left edge of the page, likely a library or collection number.